4．平安時代(９世紀～10世紀)

建物４は東西、建物５は南北に伸びる建物となります。建物４は、掘立柱建物ですが、建物範囲に覆い被さるように瓦が出土していることから、瓦葺きの建物となる可能性があります。

▲建物４の上面での瓦の出土状況

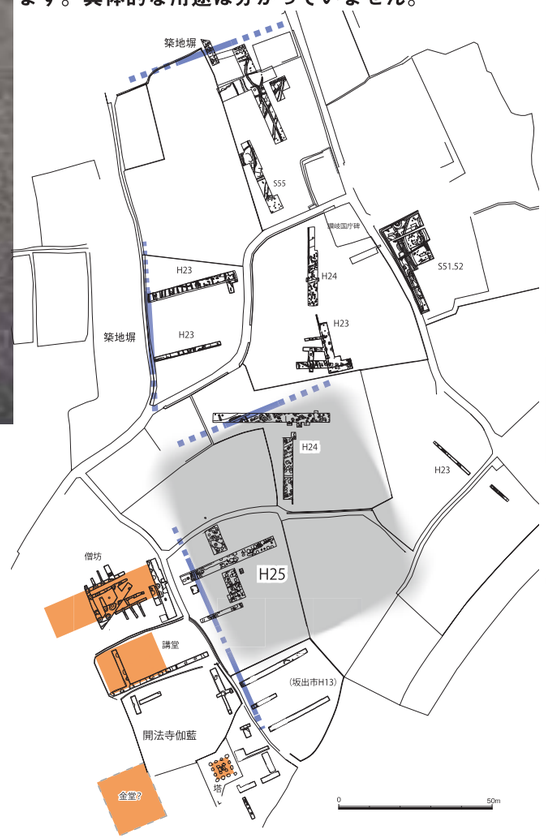
▲瓦を取り上げて建物がみつかった様子

▲　南北に延びる整地土(平安時代)

地面を浅く掘りこみ、数回に分けてたたき占めながら土を敷きならしています。建物や塀などに伴う地業(じぎょう)が行なわれたと考えられます。

◀瓦を敷き詰めた遺構(平安時代)

丸瓦や平瓦を使って、方形の囲みを作り出しています。具体的な用途は分かっていません。

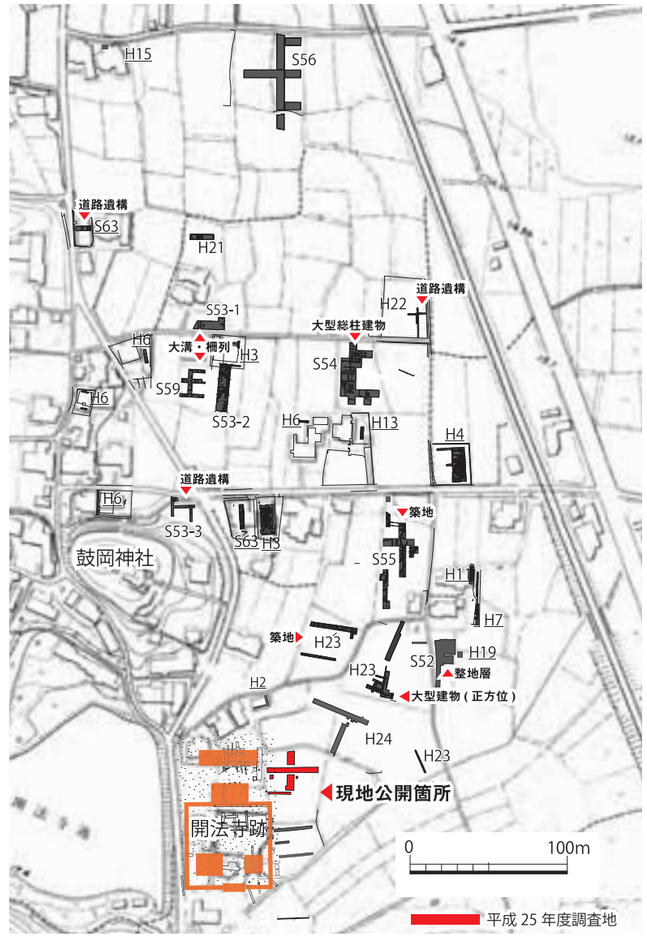


4．まとめ

今回の調査で確認された溝や建物群などは、平成24年度に確認された国衙と同様に奈良時代から平安時代のものであり、国衙の範囲を推定することが可能となりました。建物１は、国衙の中の主要建物と考えられます。しかし、平成24年度の調査成果の国衙の区画に伴う溝の条数の違いや、塀などの構造物が明らかになっていないなど、幾つかの課題が残っています。今後、更に周辺の調査を進め、国衙の大きさや内部の建物配置を明らかにしていくことが必要となります。

讃岐国府跡の発掘調査　　平成25年度讃岐国府跡現地説明会資料 2014年2月9日発行
編集・発行　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 Tel：0877-48-2191 Fax：0877-48-3249
Email：maibun@pref.kagawa.lg.jp　　http：//www.pref.kagawa.lg/maibun/

▲　讃岐国府の位置



▲　讃岐国府跡における発掘調査地点
坂出市都市計画図（1/2500）を62%に縮小

▲讃岐国府周辺の歴史的環境

1　讃岐国府とは

国府とは、奈良時代(約1300年前)の古代国家の成立とともに、地方統治の中心として国ごとに置かれた役所で、現在の都道府県庁のような施設です。讃岐国府は、奈良時代から鎌倉時代(約700年前)にかけて機能し、菅原道真(845～903年)が国府の長官である讃岐守を勤め、崇徳上皇(1119～1164)が晩年を過ごしたことでも有名です。

国府は、都や国内の郡衙(ぐんが)との連絡がとれるように交通の要衝に設置される事例が多く、讃岐国府も付近に官道の南海道(なんかいどう)が東西に通じ、瀬戸内海と綾川を介して約4kmで繋がるなど、陸・水上交通の接点となる場所に営まれています。また、周辺に建立された讃岐国分寺(さぬきこくぶんじ)・国分尼寺(こくぶんにじ)などとともに、讃岐国の中心となる地域を形成していました。

政庁　せいちょう(国庁　こくちょう)‥‥国府の中でも中枢となる施設で、儀式や政務の場
国衙　こくが‥‥国庁や行政実務行う曹司(ぞうし)などの諸施設群の総称
国府　こくふ‥‥国衙や国司の宿舎である国司館、市などが営まれた地区全域の総称

２．調査の成果

今回の調査では、開法寺と国衙との間に溝跡が確認されました。溝の東側（国衙側）となる区域では飛鳥時代から平安時代の建物跡が多く確認されました。中でも建物１は、柱穴の掘り方が 1m を越えるもので、奈良時代の大型建物になると考えられます。また、奈良時代より前の飛鳥時代の建物６など、真北を基準とした柱穴や大型土坑も確認されており、讃岐国府出現前夜の集落の広がりも明らかになりました。

▲　開法寺と国衙を分ける大溝 (奈良時代～平安時代)
上面の幅約 2.5m、深さ 0.5m の大溝です。

▲　溝の中で須恵器や瓦が出土した状態 (奈良時代)
溝の中ほどの深さで、須恵器や瓦片がまとまって出土しています。

３．奈良時代(８世紀)

奈良時代の建物跡として、建物１～３があります。建物１は、柱穴の規模からみて、大型建物となると考えられます。建物１と２は、建物の南北の柱の位置を揃えていませんので、同じ奈良時代でも時期が異なるものと考えられます。

▲　大型の柱穴をもつ建物１
建物１は、条里地割の方向で東西２間のみ確認されています。柱穴の規模からみて、国衙の中でも中心的な大型建物となると考えられますが、東西、南北のいずれに伸びる建物となるのかは確定できていません。

▲　建物１の柱穴の断面
柱穴の大きさは、約 1.3m あります。中央には、直径約 30 ㎝の柱の痕跡が確認できるので、地下に柱を埋め込む掘立柱建物と考えられます。

◀　建物２
東西の３つの柱穴が並んで確認されています。出土遺物から、奈良時代でも初めの頃に建てられたと考えられます。柱と柱の間隔(柱間) が約 1.8m を測り、建物１などと比較して狭いことが特徴です。